

コロナ禍の日本における人工知能を用いた振付作品の創作過程とテクノパフォーマンスの意義：《ベートーヴェン・コンプレックス》を事例に

吉田駿太郎（日本学術振興会特別研究員（PD）／早稲田大学）

深澤南土実（お茶の水女子大学）

近年の人工知能（AI）を用いた振付作品では、人間の身体の動きに関する膨大なデータをもとにAIが作り出す動きに焦点が当てられている。しかし、AIと振付家の協働する作品制作の中で、技術的な決定論の推移に着目すると、技術者の価値観と振付家の価値観がどのように交渉されるのか、が問題となり、作品における創作過程を重視することは、技術者が新しい技術に抱く願望と衝突する可能性も見受けられる。このような問題意識から、本発表では、AI技術者とそれを利用する振付家が協働する創作過程を紐解き、技術者のテクノパフォーマンスの意義を明らかにすることを目的とする。その際、パフォーマンス研究者のジョン・マッケンジーの著作『*Perform or Else: From Discipline to Performance*』（2001）において議論される後期資本主義の時代におけるテクノロジーとパフォーマンスに関する問題を取り上げる。マッケンジーが「我々はグローバルなパフォーマンスの時代をスキャンすることを使命とする科学的な工芸品を利用する」（McKenzie 2001, 135）と述べるように、AIと人間の共同作業の仕組みが歴史的に肯定的に捉えられてきたことから、AIと人間の共同作業の統合をめぐる疑念は重要視されている。また、AIは芸術的な問題ではなく、産業的な問題と考えられており、AIを含むダンス理論では「振付のための自動化システムへ向かうAIの軌跡」（Plone 2019, 7-8）として強調されている。本発表ではコロナ禍において東京藝術大学COI（センター・オブ・イノベーション）にて開催された《ベートーヴェン・コンプレックス》においてAIを使用することで生じた違和感のニュアンスを論じる。本事例では、過去の日本のコンテンポラリーダンスにおけるAIとダンスの協働が直面する現実世界で起こる不可視な統合を反映し、AIの無意識的な特権化に伴うAIの統合への課題を経験として提案する。

McKenzie, Jon. 2001. *Perform or Else: From Discipline to Performance*. Routledge.

Plone, Abby. 2019. "The Influence of Artificial Intelligence in Dance Choreography." *IPHS 200: Programming Humanity*, (Spring), 1–9. [https://digital.kenyon.edu/dh\\_iphs\\_prog/7](https://digital.kenyon.edu/dh_iphs_prog/7).